

## 餌高だからこそ考える飼料の無駄を省く努力(1)

米国のNPPCでは、ポークチェックオフで集めたファンドを利用して、餌高あるいは生産コストに対抗する実践的アイデアを公開しています(pork.org サイト参照)。2011年のものですが、この冊子の中から有用なものを引用して関連情報を付けて紹介したいと思います。

このレポートは連続トピックスとなります。

様々なコストが上がる中で、生産コストの半分を占める(外国は60~70%が普通)飼料費をどのように扱うかが課題です。コーンや大豆ミールの基本価格上昇が原因の多くを占めているため、生産農場では本質的な解決(飼料の流通価格の是正、輸入の仕組み、補てん金システムなど)を施してもらわない限り、生産農場でできることには限界があるという考えが主流になりがちです。しかし世界中どこでもそうですが、おなじ豚、おなじ飼料を使っているとしても生産農場間では大きな差があるものです。今できることに細かくチャレンジしないで、体制が変わらなければ難しいと考えてしまえば進歩はありません。

例えば、我々と同じ生産管理システムを共有されている92農場の今年度の第一四半期(3月~5月)の肉豚要求率を見てみると、実に2.46から3.34までバラツキがあります。仮に120kgで出荷する肉豚の場合、飼料の差が1頭あたりなんと100kgにもなるのです。これは現在の肉豚飼料購入単価(仮に40円/kgとしておきましょう)で計算してみると一目瞭然です。4~5000円の違いがあるのではないのでしょうか?これをもう少しマクロで見て、母豚200頭の農場で考えてみましょう。年間22頭出荷している農場だとすると、この差は何と年間1,680~2,200万円にもなります。これは極端な話ですが、仮に肉豚要求率が平均的な2.8だとしても、2.46が達成できるとしたら恐ろしいほどの差になるのです。こうした観点から管理面でのスイッチを入れ直すべきときは遅ればせながら今だと思います。

アメリカではコストに占める飼料費の割合は70%と日本よりも大きく、それだけにこうした飼料に比例した生産コストの増大に頭を悩ましているのはご承知の通りです。アメリカといえども大規模な生産者はわずかで、多くが複合経営の家族養豚の規模です(ほぼ日本の10倍というも家族養豚の中でも専門の人たち)。彼らも餌高の中で積極的にまずはできることからトライして目標成績に近づけることが重要との共通認識を持っています。彼らと境遇は確かに違いますが、少なくともコーンベースの飼料を与え、アメリカ的に管理している以上多くの学ぶ点はあろうかと思えます。

### コーンの粒状を700ミクロンから650ミクロンにする

100ミクロン小さくなることで要求率が1.2%下がると言われています。しかしダストを増やさないようにしなければなりません。この点は日本の生産者はほぼ飼料会社に依存した部分がありますが、自家配が主流のアメリカではこのような細かい調整も一つの要望になってきているのは事実のようです。

### ペレットの質を高める

ペレットの質が悪くとせつかくのメリットも生かされません。大事なのが粉が20%以上含まないようにすることです。ペレット化することで利用される栄養素も広がり、ダストも減り、無駄がなくなり、要求率も向上するのが一般的です。しかしペレットに変更可能な飼料はスターターまでです。コーンや大豆粕が多いと難

しく加工ができません。

### 自家配をしている人なら機械の調整と製造効率

機械の調整不良による無駄は大きなものですので、粉碎機のローラーやミキサーなどのメンテナンスは入念に行います。

### ウェットドライフィーダーを検討する

飼料の無駄を省けることで、新たな提案として挙がってきています。従来まで操作が難しくアメリカ人にはドライフィーダーというのが定番でしたが、出荷体重がどんどん大きくなることでより食べやすいフィーダーにする試み、使いやすく改良されたフィーダーにもう少し関心を持ってもらいたいおというのが専門家の意見のようです。飼料に対する嗜好性も向上するため飼料摂取量が増加し、これに伴って増体も期待できるのですが、アメリカ人にとっては大きなチャレンジとも言えそうです。



故障あるいは調整ミスであふれた餌

### 壊れたフィーダーは直ちに交換

言うまでもありません。日々の管理の中で大変重要なポイントです。最も大きな餌の無駄につながりますし、使いにくく壊れたフィーダーは管理の手間も大変です。効率の良い改良されたフィーダーに交換することがお勧めです。

### フィーダーの調整は適切に、豚にあわせた適正な頭口数を

調整のミスで餌が無駄になってしまうこともあります。日々管理面で努力が必要です。人工乳では若干出し気味にしている農場が多いですが、育成期以降の飼料になれば、特に鼻で少しづつ落として食べるくらいがベストと言われています。管理上少し出し過ぎの農場が見立つのも事実ですが、締めすぎると食べられないからそうしているという答えが返ってきます。こうした農場ではすでにドライの限界に達しているはずですが。フィーダーの頭口数を増やすか、豚を減らす、あるいはウェットフィーダーに変更する等、抜本的な対応が必要ですが、弾力性のある経営判断が特に重要と言えそうです。



タンクからこぼれた大事な餌

### カビ毒のチェックと対策

カビ毒は慢性的な生産性を落とす厄介者で、検査できないものも実は無数に存在します。穀物の育つ過程から生成され、穀類の割れなどのダメージや、保管温度、水分等の影響でも増加します。国でも域値を越えた穀類の場合には広報で注意を知らせますが、基本的には常に存在するものだと考えてカビ毒吸着剤を使用し、配合工場レベルで個別対応するのが方法になっています。個々の農場レベルでトッピングして対応するよう推奨するメーカーもありますが、それこそ投資と回収の関係が重要です。本当に問題レベルの毒素量なのかを冷静に判断する必要もあるでしょう。



不良のコーンにはカビが生えやすい

### 飼料の予算化原料の再見直し

各飼料原料が適正に配合されていなければ効率的な飼料が的確に豚に届きません。コストと配合飼料原料の関係はともに満足した内容でなければなりません。そうでないと不完全な内容、コストの高い飼料ということになってしまいます。特に自家配をしているアメリカの農場では全てが自己責任ですからこのような考え方が主流になってくるのです。

### フェーズフィーディングの再検討と雌雄別飼い

各飼料の原料内容を再度検討し、体重、使用育種の栄養要求性にも応じた設計になっていなければなりません。育種によってはかなり異なることが広く知られているからです。育種を頻繁に替えるアメリカ人ではなおさらのことです。飼料の効率を高めるために雌雄別飼いも大規模な農場はともかく中小規模でも提

唱されます。特に出荷体重が伸びている昨今、さらに余分な成分を省き、期間限定の配合添加物を最低コストで最大メリットを配合する等を行うにはかなり高い細かな感覚が必要になってきます。

### **母豚に合った最適な栄養設計を**

不十分な栄養では繁殖成績の極値は得られません。特にギルトから2産目までは体の成長にあわせて十分なリジンやエネルギーの補給は大丈夫でしょうか。母豚は特に微量ミネラル、例えば亜鉛、銅、鉄等を必要とします。さらに飼料タンクやラインなど母豚に過不足なく供給できるタンクやラインなどのハード面も充実しなければなりません。特に委託肥育農場が多いので、破損や故障などの対応がスピーディーでないような気がします。

### **餌切れ、最悪の事態、これをできるだけなくす**

委託管理農場は概ね少人数で管理されています。うっかりしたら半日餌を食べていないこと、タンク内でブリッジができていた等、本来不断給餌として与えられなければならぬ飼料が豚に与えられていない現象が大きな問題になっています。その為タンクやラインに取り付けて餌の滞りがある際には警報が鳴る、ブリッジを感知し振動で修正するシステムも開発されています。さらにこまめに管理者に通報するシステムも出てきました。よく餌の配送の連絡行き違いで餌切れが起きてしまうこともあると思いますが、豚は飢餓状態になると餌が出た時には争いが始まり、場合によっては深刻な怪我や疾病の原因にもなりかねません。発生経験のある農場は、頻度、原因、予防策等を事前に検討しておきたいものです。(続)

2012年10月 グローバルピッグファーム(株)